ISSN 0289-9191

台湾情報誌

交流

2015年1月 vol.886
公益財団法人 交流協会
Interchange Association,Japan

デザインが結ぶ日本と台湾

交流

2015年1月
vol. 886

目次 CONTENTS

デザインが結ぶ日本と台湾
～グッドデザイン賞にみる台湾デザインの発展と、
日台相互連携の可能性～ …… 1
（青木史郎）

台湾駐在・再訪記 ……11
（市川隆治）

【台湾内政をめぐる動向】
「九合一」選挙後の情勢と陳水扁前総統の「仮釈放」 ……18
（石原忠浩）

台日同名32駅・同名さん駅長体験付台湾旅行への参加……26
（松寺 富貴子）

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。
※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。
万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

交流協会について

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。
東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

デザインが結ぶ日本と台湾

～グッドデザイン賞にみる台湾デザインの発展と、日台相互連携の可能性～

日本デザイン振興会　常務理事　青木史郎

交流協会の導きで、青木とデザイナーの清水久和さんは、高雄で開催されたデザインセミナーに参加し、幾つかの製造業を訪問することができました。青木はデザイン振興に携わってきた経験から、また清水さんは大手製造業のスタッフデザイナーとしての実績をもとに、「デザインという知恵の生かし方」についてお話したのですが、幸いなことに、ものづくりに係わる方々と交流することができました。また台湾を代表する研究推進機関の一つである「金属センター」とも、連携協定を結ぶことになりました。今回の訪問を期に、デザインを通じての日本台湾の交流と協同が、台湾南部でもより一層発展すると期待できそうです。

デザインを通じての日本台湾の交流は、大手製造業の台湾にある協力企業への支援として始まったようです。同時に自社のデザイン能力を向上させるため、台湾企業から日本のデザイナーへの仕事の依頼もありましたが、こうしたいわば情報落差のある交流は、台湾の製造業が急速に発展し、そのデザイン力が世界と肩を並べるまでに成長したことで大きく転換していきます。日本のデザインは最早不要になったかのように見受けられますが、次なる飛躍を遂げていくためには、日本に蓄積されたデザインノウハウ、また日本のデザインが開拓しようとしている新しい考え方との連携が不可欠であるように思われます。台湾の多くの経営者、研究開発者、デザイナーは、すでにこの様に受けとめていますし、また多くの日本の若いデザイナーにとって、台湾の企業との連携は、国際的なデザイン市場に参加していく第一歩となりましょう。

デザインを通じて日本台湾の関係もまた、新しい時代を向かえているようです。そこで「交流１月号」では、昨秋の訪問を踏まえ、グッドデザイン賞が実施してきた台湾での審査からみた台湾デザインの発展を紹介するとともに、新たな相互協力の可能性について述べたいと思います。

○　日本デザインの強み

さて、今回の高雄での講演のテーマは「イノベーションとデザイン」です。イノベーションというと技術革新と考えがちですが、「ものごとの新しい捉え方を見つけること」と理解すべきでしょう。となるとデザインが欠かせない。このデザインについても、ものの外観を新しく綺麗にすることと理解されがちですが、デザイナーによって導かれる美しい外観は、「新しい捉え方」を見いだしたことによって導かれたものなのです。デザイン専門家の視点からいえば「イノベーション=デザイン」ですが、デザインだけでイノベーションが達成できるわけではない。デザインは触発剤あるいはまとめ役として機能するのであって、その核となる部分は技術的革新です。むしろ技術的革新とデザインが協同することによって、イノベーションは実現性を帯びると考えてよいでしょう。

日本のデザイン、特にものづくりのデザインは、60年程度の歴史を持ちますが、ひたすら技術との協同作業を指向し実践してきました。それは商品の見栄えをよくするという、表皮的な活動から始まります。しかし「商品のかたち」を描くには、

まずその利用者の実態や生活への期待を把握していなければできません。デザインが製造業に導入され始めた時期に、企業に飛び込んでいった誕生したてのデザイナー達は、その実践を通じて「生活者の視点からものごとのあり方を考える」スペシャリストへと育っていきました。1960年代は身近な技術革新が目白押しに登場します。また私達の生活も、農業を基盤とする社会から産業を基盤とするそれへと急転していった時代です。技術革新を生活を便利に楽しくする道具や機器へと置き換えることが、デザイナーの仕事になりました。そして技術革新が停滞すると、「生活のあり方」、いわば期待されるライフススタイルの側からものづくりを担う存在へと進展していきます。1980年頃に登場する「ウオークマン」や「無印良品」などの事例を思いだしていただければ、その成長ぶりが窺えます。そして今日では、エコロジー問題や持続可能な社会の実現という課題を実践していくために、様々な専門領域を統合する視点を提供する役割すら担おうとしています。

この様に日本は、デザインをものづくりに活かすことによって、数々のイノベーションを実現してきたのですが、このデザインを支えた装置が、我田引水的になりますが、日本デザイン振興会が主催している「グッドデザイン賞」という評価推奨制度です。この目的は、「デザインを通じて生活。産業、そして社会を健全に発展させること」と唄っていますが、つまるところデザインの裾野を広げ、デザインという知を、誰もが何処でも活用できる状態に育てていくことです。

○　グッドデザイン賞という装置

まずグッドデザイン賞の概要について説明しておきましょう。

この制度は1957年に経済産業省によって創設されます。当時の名称は「グッドデザイン商品選定制度」。輸出により外貨を稼ぐことが何より優先された時代です。その為には「オリジナリティの高い商品を生み出す」デザインが欠かせないと、デザインへの理解と取組を促すことを目的に産まれました。デザインという言葉も一般的でない時代です。そこに「デザイン課」を設立してまでの取組でしたから、経済産業省の「先物買い」といっても過言ではないでしょう。しかしこの行政の「掛け」は実ります。全ての製造業分野へデザイン導入に成功しただけでなく、1998年に行われた制度民営化以後も発展を続け、およそ60年を経た今日には、アジアからも支持される影響力の高い推進装置へと育ちました。ちなみに1957年から3年間の選定数はわずかに66件、そして2014年は、3,600件の応募の中から約1,200件がグッドデザイン賞を受賞しています。量が増え分野が拡大しただけでなく、そのうち約20%は韓国、台湾、中国、タイなどのデザインが占めています。

私達は、このグッドデザイン賞について、以下4つの特徴を挙げています。

1．永い歴史をもち、今日も発展し続けている。

2．あらゆるデザイン分野を対象としている。

2014年の受賞対象でみると、モノのデザイン分野60%、建築・環境分野20%、コミュニケーション分野10%、さらにサービスやコミュニティー活動などの「コトのデザイン」分野10%です。

3．アジアとの連携協力によって進められている。

タイ、インド、シンガポールでは、グッドデザイン賞の仕組みを移転し、各国の政府やデザイン振興機関と新しいデザイン賞を設立しています。また韓国、台湾、香港では、現地での審査会を実

施するとともに、デザイン振興機関等と協力して産業支援活動を展開しています。

４．日本の生活者の高い支持を得ている。

グッドデザイン賞受賞の証である「Gのマーク」の認知率は、88％にもおよびます。

このようにグッドデザイン賞は、世界で最も成功した振興政策といって良いと思いますが、その仕組み自体は、「よいデザイン」を選び、それを豊かな生活と高度な産業活動を築いていく「よい見本」として社会に向けて提示するという単純なものです。誰もが思いつくような啓蒙的な行政施策であり、先駆的な展開は既に英国等で実施されていました。しかしそれらの多くが歴史の一ページとなったに係わらず、日本のグッドデザイン賞だけが成功する。その要因を考えてみましょう。

それはまず、振興すべき対象を時代に応じて変化させていったからに他なりません。当初は輸出振興に始まり、生活用品の質的向上、さらに産業財を含めた工業製品へのデザイン導入の促進、1980年代からは生活の充実、90年代には地球環境対応、そして民営化以降は、ポスト産業社会を見据えた新たな社会的課題への挑戦といった具合です。つまりこの制度は、業界育成的なコンクールではなく、産業政策として戦略的に運営されてきたことによって大きな影響力を発揮できたのです。近年アジア諸国からグッドデザイン賞自体の「技術移転」が求められているもの、この理由からと思われます。

もう一つの成功要因は、選びっぱなしにせず、受賞者とともに生活者や社会への訴求活動を展開してきたことでしょう。主催者であるデザイン振興会は、市民向けの展示会を開催するだけでなく、大型販売店やメディアへの働きかけを常時おこなう。受賞した企業やデザイナーは、その成果を最大に訴求すべく広報宣伝活動を展開する。その継続による成果は、88％という驚異的な認知率に顕れています。グッドデザイン賞はその発表日の夜に、複数のテレビニュースで報道されますが、これもこのデザイン賞が社会的な制度であることの証となっています。

グッドデザイン賞は、「いいねを共有しませんか」と発言しているに過ぎません。特別な権利が与えられるわけでも、また権威に彩られているのでもありません。ひたすら善意に満ちた、ある意味で弱々しい存在にすぎないのですが、この仕組みを「デザインを社会化する装置」、さらには「デザインを通じて社会を良くする装置」として育ててきたことが、日本の大きな強みとなっているはずです。

○　台湾とのデザイン連携

さてこの様にグッドデザイン賞は、日本では「社会を推進する装置」として認識され、また高いブランド力を発揮することができました。しかし日本一国の範囲で成長を語れる時代は、既に過ぎ去っています。デザインという面でも、サムスンなどの韓国企業の台頭は目覚ましく、また台湾や中国のデザインも急速に発展しています。こうした時代変化を前に、「進んでいる遅れている」といった狭い対比論は無意味で、むしろ「全員が参加できる場・機会」を創りだすことで、デザインの力を国際的に伸ばしていくことが求められているはずです。また成長が著しいアジアでは、それこそ無数のデザインを必要としています。そのデザインの質を高めることは、生活の質、産業の高度化、さらには社会の健全な発展を導きます。それこそ、グッドデザイン賞が使命としてきた課題に他なりません。

そこでグッドデザイン賞は、デザインを通じて「アジアの生活と産業をより豊かにするプラットフォームを築く」という基本方針を掲げました。そしてタイのデザイン賞設立支援に始まる連携活

動を展開するとともに、2012 年からは韓国と台湾、そして 2013 年からは香港で、応募された対象をその地域で審査する活動を開始しました。

台湾からの応募は、グッドデザイン賞が 50 周年を迎えた 2006 年ごろから増加していました。ただしグッドデザイン賞の特徴でもある、セミナーや相談会などを通じてのデザイン育成の機会を提供することができなかったため、応募者とのコミュニケーションが充分に取れていませんでした。そこでデザイン振興会と同様な機能を担っている「台湾デザインセンター」との連携を開始し、特に 2012 年からは相互互換的な協力関係を築いていきました。日本デザイン振興会は台湾サイドが日本で展開するデザイン振興活動を支援する。そしてその逆の活動を台湾デザインセンターに依頼する。具体的には、応募段階での説明・相談会の開催、台湾での審査の実施、受賞対象の台湾メディアへの訴求、台湾デザインセンターが主催するデザインフェアでの発表展示など、通年的な協同プログラムを展開しています。

この 3 年間の実績は、台湾審査初年度の 2012 年は受賞 64 件、2013 年は少し下がり 41 件、そして 2014 年は回復し 58 件となっています。グッドデザイン賞の受賞水準は、他の国際的なデザイン賞と比較してもかなり高いので、応募自体が急激に増加するということはないのですが、その受賞内容をみると、まず台湾が得意としてきたコンピュータとその関連機器の範囲を超えて、様々な分野領域へと広がりつつあることが覗えます。また 2014 年は、全ての受賞対象から選ばれる「ベスト 100」に、台湾デザインが 5 件も選ばれていています。これは審査委員会によって、「明日のデザインを予見させるもの」という視点から選出されますが、台湾のデザインが、既に国際的な水準にあり、またそれを凌駕しつつあることの証と考えてよいと思います。

以下、グッドデザイン賞の審査を通じて出会うことができた、台湾デザインを紹介しつつ、デザインを通じての交流と協同の可能性を考えてみましょう。

○　JIA の調理器

まず最初に紹介したいのは、JIA という企業の、「白い磁器の鍋と蒸籠を組合せた調理器」です。鍋の部分で鶏のスープを作り蒸籠で点心を暖める、そんな使い方がイメージできます。キッチンにさりげなく置いてあるだけで、その場面が明るく楽しくなるような「さそい」が、このデザインから感じられます。

この調理器との出逢いは、グッドデザイン賞の台湾での展開を積極的にはかろうと、デザイン系の売場やデザインオリエンテッドな企業を訪問していた時でした。私はこの調理器を通じて、「台湾デザイン」の可能性を確信することができました。このことが「台湾でも審査をやろう」と踏み切る、大きな要因となったのです。

この調理器は素晴らしいデザインなのですが、その評価を少し考えてみましょう。
調理器など日常的に用いられる道具や機器のデザインは、まずモノとしての用途性や妥当性を確保しなければなりません。それが何者であるか、ど

う使うのか。いわば「5 W 1 H」を明確に述べることです。しかしそれでだけでは不十分で、「生活を楽しく豊かにしませんか」といった、呼びかける言葉を語っていくべきでしょう。つまりデザインとは、「もののかたち」を通じて、物理的にも精神的にも充足できる「ヒトとモノとの関係」を導くことなのです。この調理器は、そうした生活への眼差しを踏まえてデザインされています。

もう一つは、それが「台湾デザイン」であること。つまりそのデザインが、その地域で産みだされる根拠といったものです。蒸し器はアジアでは誰もが使ってきた調理道具です。台湾の家庭では、中華鍋にお湯を沸かし、その上に蒸籠を載せていたものと思います。ただし生活様式が変わり始める、都市部の集合住宅では、家族構成の少人数になり、食事の好みもまた機会も家族一緒とは限らない。また調理した器をそのまま食卓に出すことにも違和感がなくなっているのかも知れません。この調理器は、そうした生活変化を見事に受けとめています。「いまそこにあること」に何ら違和感はありません。つまり蒸籠を進化させる必然性をもったデザインがなされているのです。

JIA という名前は、「家」の中国語の読みからきいているそうで、家族団らんを創りだすことを社是としています。そのホームページでは、東西の融合によるデザインを主張します。台湾の方だけでなく、ヨーロッパや日本のデザイナーも参画していますが、そのデザインは、いたずらな華燭を避けて必要不可欠な要素を磨きこんでいくというモダンデザインの文脈を踏まえているものの、そうしたデザインが陥りがちな無味乾燥なデザインを越えて、高度な造形感覚に裏付けられた豊かさを醸しだしています。

この背景には、オーナーの林安鴻さんの中華文化への深い眼差しと、新しいライフスタイルを構築していこうとする使命感が感じられます。同社の商品は継続的にグッドデザイン賞を受賞していますが、そのデザイン姿勢にぶれはありません。デザインは「こうあるべき」を主張する思想的な側面をもちます。というより思想なきデザインは、単なる商業主義にしかなりません。その様な意味で、明確な眼差しをもった JIA は、中華文化を核に、デザインを通じて新たな文化産業をプロデュースしていく役割を担い続けていくものと思われます。

○　ASUS の ZENBOOK シリーズ

ASUS は「最も美しい PC を提供している企業」といっても過言ではないでしょう。

同社のデザインセンターを私が始めて訪問したのは 10 年ほど前に遡ります。当時からデザインの水準は高かったのですが、主力のデザイナーが 20 代であることまず驚かされました。高齢化が進んでしまった日本企業のデザイン部門とは異なり自由度が高い。また働いているデザイナーが多国籍であることにも好印象をもちました。世界中で使われる商品をデザインするには、文化的背景の異なるデザイナーが複数参画した方が良いからです。その後、造形に定評のある日本大学芸術学部に学び、ソニーでもデザイナーとして活躍していた柳明智さんがリーダーとなり、スキルだけでなくデザイン思想やマネージメントのレベルも飛躍的に向上していきました。グッドデザイン賞では、パナソニックやサムソンなどと肩を並べ、「受賞数ベスト 5 」の一角を担っていただいているほどに、デザインでも先導的な企業へと成長されましたが、特に ZENBOOK の投入を期に、世界の競合を一気に引き離したようです。もはや「前人未踏」といって良いかも知れません。

ZENBOOK シリーズの最新機種が、今年のグッドデザイン「ベスト 100」に選ばれました。この

UX350は、アルミボディにセラミック塗装を施したもので、「触ると今までに体感したことのない質感を成功させた。匠とまで言えるその作り込みは細部にわたり上質で、エレガントである」と、審査委員の田子學さんも絶賛します。確かに触るとゾクッとした快感がある。そして「ASUSはPCを軸に使う人達のここちを創出しており、UX350はそのデザイン姿勢が強く反映している」と、同社のデザインポリシーをも高く評価しています。ベスト100に選ばれたPCはこの機種のみ。審査講評で「匠とまでに」とか「ここちを創出」といった褒め言葉が使われることはめったにないのですが、多くの審査委員も異口同音に、「これはもはや工芸品だね」と微笑んでいました。

なぜにこのデザインは、デザイナーの心を捉えることができるのか。それを「匠、工芸品、ここち」といった言葉を頼りに紐解いてみましょう。

まずPCは極論すれば「消耗品」です。その寿命は、3年長く使っても5年。よって安価で過不足なく使えれば充分との考えも成り立ちます。故に普通の品質でよい。しかしZENBOOKは、その「過激さ」ゆえに使用者をある種の「境地」へと導きます。

PCは手と眼が直接的に係わる機器です。従って「眼・脳・手の連携」を、機器がストレスなくシームレスにサポートが否かが問われます。情報を身体の内部に取り込む、そして判断された情報を外部化する。PCは単なる人工物ではなく、身体の延長でもあるのです。この身体性を確保でが、PCの出来を左右するのです。少し比喩的ですが、情報をどこまで咀嚼できるか、端的に言えば「味わえるか」によって、アウトプットの質は大きく変わります。その為には、情報を単なる記号としてではなく、その背景や微細なニュアンスまでへも拡張してとらえる、「優れた感覚・消化器官」が不可欠となるはずです。

デザイナーは、いわばレシーバーを研ぎ済ますことを修練しているのですが、その鍵は「共通感覚」という概念で説明できます。視覚、聴覚、触覚等の五感は、バラバラと受けとめられがちですが、しっかりと通底しています。鮮明な液晶をみると音もクリアに聞こえるといった体験は誰しも持っていると思いますが、これを「共通感覚が働いている」と考えます。このUX350の事例でいえば、ゾクッとくる触覚が、視覚を拡げ、共通感覚を刺激し、「情報と味わう」という意味での味覚を高感度にするのでしょう。デザイナーは、「洗練された美しさとうい快感が、感覚を研ぎ澄まし大胆で精緻な思考を触発すること」を充分に知っています。多分それは「創造の快楽」を産むはずです。それ故に審査委員は、このPCを絶賛したのでしょう。PCを「思考の道具」と捉えるならば、ここに示された一見過剰と思われるデザインが、ものの本質を進化させる鍵となっていることを理解することができでしょう。ASUSがこのシリーズに、悟りの境地を指向する「禅」という名称を与えたのも、うなずけるようです。

将来的にPCは姿かたちを変えていくものと想像されます。しかしASUSがZENシリーズで示した「妥協しない姿勢」と「突き詰めていく力」を発揮し続けるなら、新しい情報機器のあり方を創造できるはずです。

○　GIXIAのLEDライトシリーズLUXIFER

2014年の「ベスト100」には、インダストリア

ルデザインの王道とも言うべき事例が登場します。 GIXIA グループの LED ライトシリーズ「LUXIFER」は、技術とデザインが協同することによって、LED ライトの製造に革新的なイノベーションをもたしました。

手元にある LED ライトを分解してみるとすぐわかるのですが、基板に LED がつけられるという、如何にも電気部品的な旧態依然とした方法で作られています。これでは製造コストも高くなるはず。エンジニアもデザイナーも新しい解決を求めたくなります。

この LED ライトは、「金属部品の代わりに、ダブルインジェクション技術による導電性と熱伝導性に優れた樹脂を採用するとともに、導電性接着剤を使って、AC LED を直接挿入することで。組み立て工程を単純化」したもの。いわば「生産工程のデザイン」なのですが、審査委員もこれを高く評価し、「デザインとエンジニアリングの革新的な取組により、精巧なものづくりと圧倒的な簡素化に成功した。その結果、効率設計と照明の美しさを犠牲にすることなく、コストを削減、普及に貢献するデザインとなった」と賞賛します。スマートでエレガントな解決が、日常的に使われる機器をより快適にし、広範な普及をもたらす。この事例はその好例でしょう。

この LED ライトは、謝栄雅さんいうエンジニア出身のデザイナーによるものです。コンピュータ系の勉強をされ、大手企業のデザイン部門に勤務、その後、台湾の技術開発を先導する工業技術研究院のインキュベーションを活用しながら独立を準備されたと聞きます。この経歴を聞いて、私はこの LED ライトが産みだされるデザイン的背景を覗うことができました。このライトシリーズは、造形のみに終始するデザイナーにはできない。技術とデザインの関連を理解できているデザイナーが、台湾でも育っていることを頼もしいと感じました。また台湾工業技術研究院そのものも、今年は「消防用のライト付きノズル」で受賞されています。消火の祭に強力なライトが必要というニーズを具体化したものですが、そうした現場に相応しい使いやすさと頑丈さが確保されています。ここにも台湾デザインの新しい可能性を見いだしたように思いました。

このような革新的な機器やシステムが誕生するには、ものづくりの川上から追求していく技術的アプローチと、使用の場面やライフスタイルといった、川下から遡るように思考していくデザイン的なアプローチが「噛み合う」ことが大切です。技術的な解決が一段落した段階で、デザイナーが呼ばれるというケースが多々ありますが、これではその技術の良さを商品開発に充分活かすことができません。デザイナーに技術の可能性を検討させること。つまりデザイナーに技術開発の伴走者としての役割をあたえることが重要です。LED ライトの事例でいえば、デザインが後付的であったなら、「生産工程のデザイン」だけで終わったかもしれません。それを「めしべと花弁」というわかり易い比喩に置き換えて商品化できたことで、「普及に貢献するデザイン」ができたのです。

このエンジニアリングとデザインの協同作業には、高度なマネージメントを必要とします。恐らくですが、この手法の確立こそが、イノベーションを可能にする台湾企業を数多く誕生させていく鍵となるように思います。

ASUS などの先端的な企業は例外として、台湾企業には応用的な商品が多いと感じていました。これはこれで、市場対応力が早く小回りがきいて良いとはいえるのですが、長期的にみて国際的な競争力を欠くのではないかと懸念を覚えました。しかしこれは杞憂であったようです。素材や技術の開発を担う工業技術研究院が、具体的な商品化

の部分までを先導していることがわかりました。

日本の場合、国公立の研究所は基礎的な技術の開発にウエートを置き、商品にできそうな技術の開発は各企業が担当するという図式でしょう。台湾の場合は、国が企業の領域をかなりカバーしているようです。これは民間の開発力が未成熟であるから、肩代わりしていると解釈されてしまいそうですが、デザインという視点からみると、より好ましい構造のように見受けられます。つまり技術開発が独立しているため、「国から企業への橋渡し」の部分に、デザインが登場できる可能性が生まれるからです。デザインが核となって、技術の商品化を先導する。さらには技術・生産・販売の水平分業をまとめていく。このことが、イノベーションを産みだすチャンスを拡大することはいうまでもないでしょう。

ただし、水平的な分業を前提としたデザインの活用法は未だ手探り状態です。ここに豊富な経験を持つ日本のデザイナーが連携していく理由が見いだせそうです。彼等が台湾のエンジニアやアントレプレナー、さらにはデザイナーと協同していくことによって、具体的な成果だけでなく、新しいデザインの活用方法、さらにはビジネスのスタイルをも開拓できるように思われます。

○　TATUNG の電気釜

私は、台湾の企業に感謝するとともに、日本のデザイン関係者として気恥ずかし思いをしたことがあります。それは 2012 年に台北で開催された世界デザイン会議に関連する展示会でした。ここには台湾を代表する家電メーカー、大同電気が出品しており、その壁面には「歴代の電気釜」が並べられていました。特に 50 年記念バーションは、気合いの入ったものでしたので、グッドデザイン賞にも応募いただき、2012 年の「ベスト 100」に選ぶことができました。

この 50 年記念バーションについて、審査委員は次の様に述べます。「ベースは 50 年以上前に作られた東芝製の炊飯器であるが、これを『正常進化』させ、日本の炊飯器とは違う筋道のプロダクトとして現在に至っている。オリジナルの良さを壊すことなく、現代でも通じるデザインに仕上げていることを高く評価したい」。日本の企業に、少しおもんぱかりがあるような一文ですが、「正常」という語句に評価の全てが集約されています。

ここにも紹介されているように、この記念モデルは 1955 年に登場した「東芝電気釜」を踏襲しています。この電気釜は、日本において工業的に生産される商品にデザインが導入され、そして成功した始めての事例でしょう。技術的な解決も素朴で素晴らしいのですが、ふっくらとした白いお米のイメージやお釜や竈の象徴を巧み引用した造形によって、「お米を炊く機器としてのたたずまい」を与えることができました。このことが爆発的なヒットを生み、日本人の生活を変えるまでの力を発揮していきます。しかし問題はこれ以降、60 年にも及ぶ炊飯器の進化がどうなったのかです。今日の売場に並べられた炊飯器は、好意的に見ても「お米を炊く道具」ではありません。

大同電気は、当時東芝と関係があったので「東芝電気釜」を作り始めました。ただし東芝だけでなく、日本の電気メーカーは、販売サイドの新製

品を求める声におされ、根拠なく新しいかたちを追いかけ始めます。果ては新幹線「のぞみ」の頭部のかたちをなぞった炊飯器まで登場する始末です。炊く技術はマイコン制御、さらにはIHへと進化していきますが、モノのデザインの基本は「それが何であるか」を示すことであるはず。「米を炊く」という役割すら、ないがしろにされていきました。

一方大同電気は、「電気釜」を踏襲しつつ、機器の性能を淡々と進化させていきました。台湾ではお米だけでなく万能調理鍋へと発展していきますが、そのかたちは基本的に変化していません。50年記念モデルだけは、いわゆるデザインが少しされていますが、それも「東芝電気釜」へのリスペクト、あるいはオマージュ的理解と思います。実は現在も「東芝電気釜」とほとんど同じかたちの商品さえも販売されています。

お米を炊く道具として定着したのだから、そのかたちは「変えなくてよい」。この選択は、感覚的に「正常」でしょう。だから審査委員も「正常進化」を述べたのですが、ただしこれを50年にも渡り継承していくことは、同社とそのデザイナー達が「生活文化に対する責任」を自覚できているからに他なりません。また、それで良しとする経営者、さらには生活者を褒めるべきでしょうか。

時代は一巡りして、商品差別化を求めるだけの造形は不要と、誰もが考えるようになりました。つまり「変えなくてよいものは、変えてはいけない」。大同電気の電気鍋の歩みは、今日の日本のデザインにとって良薬となるはずです。ただし「良薬口に苦し」ではありますが。

○　生活者との協同

これまで紹介した事例は、最良に近いものではありますが、台湾のデザインがすでに世界水準にまで成長している証ともなります。従ってデザインを通じての日本と台湾との連携も、新しい次元を向かえていることもまた明らかでしょう。

デザインという視点からみた台湾の利点は、LEDライトについて述べたように、技術開発を含めて「水平分業型のものづくり」が採用しやすく、また経営者だけでなく技術者も含めて起業家精神に富んでいることでしょう。一方その短所は、ものづくりがサプライサイドからのみ発想されていることではないでしょうか。ごく単純にいえば利用者生活者が不在、デザインも「お客」ではなく「作り手から目線」なのです。この短所を補い、長所に結びつけることができるなら、台湾はデザインを通じて大きく発展できるはずです。また日本のデザインも、その発展に協力することで新たな成長を遂げる。そうした互恵関係を築いていくことが求められるはずです。

日本のデザインに何ができるか。まず日本のデザイナーに蓄積されているデザイン能力、生活を汲み取り、それをもってものづくりを調整していくといった能力は、台湾においても有効に機能するはずです。

20世紀に大きく発達したデザインは、競争力の高い商品を産みだす手法として活用されましたが、それはデザインが、恣意的なものではなく、使い手の生活の論理からものごとの有り様を掴む思考として確立されたからに他なりません。デザイナーは、あるべき生活を指向しつつ産業サイドに身を置くという矛盾した存在なのですが、日本の製造業は、このデザイナーの力をある種の調整技術として活用することによって、国際的な競争力を発揮していきました。この受け身的なデザインの使い方こそ、日本が確立した最大の成果なのです。この力は、おそらく台湾の製造業にとっても同様な効果を発揮します。台湾の企業が、企業のものづくりを健全に進化させる礎と受けとめた時、新しい連携の糸口が導けるはずです。

もう一つ重要なことは、モノを作り提供する側とそれを享受し活用する側、つまりサプライサイドとディマンドサイドをつなぐ「架け橋」を築いていくことでしょう。

日本の場合、グッドデザイン賞がこの機能を果たしてきました。この制度を通じて提示される「よいデザイン」は、ある意味で「仮説」でしかありません。それが生活者の支持するものと全く異なっているなら、またあまりにも合致しすぎているなら、「仮説」としての役割は果たせず、制度は不要となります。グッドデザイン賞は、ある意味で「賛否両論」を提示してきました。「これは良いと思いますが」と生活者に問いかけ続けました。この継承によって「よいデザインを求め」、「より豊かな生活を探求する」という機能を果たすことができたのでしょう。グッドデザイン賞はデザインを通じて産業と生活者が「対話する場」となっていきました。

台湾には「ゴールデンピン」というデザイン賞があります。「台湾デザインセンター」が主催するこの賞は、今年から中華圏を中心に国際的な賞へと飛躍しましたが、この賞とグッドデザイン賞のさらなる連携を含め、「架け橋」を充実させていく政策が求められているものと思います。

さて、この「架け橋」が時代の要となってきたのは、生活者が「ものづくりの主役」としても登場し始めたからに他なりません。３Ｄプリンタの発展と普及は、新しいものづくりを可能にします。産業の花型である自動車すら、街のプリントショップで自分好みにボディを出力できる時代がきつつあるようです。ここでは、サプライサイド、ディマンドサイドといった区分さえありません。「かたち」の提供者は、誰であっても良いのです。

むしろデザインという知恵そのものが、生産を、販売を、そして生活を繋ぐプラットフォームとして機能すると考えてもよいでしょう。

「こんな車のあり方素敵でしょ」と提案する。これは世界中の誰にでも開かれています。しかしそれを実現するには、製造技術に置き換え、資金を調達し、提供経路をつくり、生活者の支持を集めるという、開かれた仕組みが必要です。こうした「ものづくりのプラットフォーム」を具体化できるのは、アジアでは日本と台湾だけと思います。

調整役として発展してきた日本のデザインは、ここでは大きな力を発揮できる。また台湾のもつ起業家精神も活かされる。両者が連携し協同することによって、次世代のものづくりと新しい繁栄を築いていくことができそうです。

台湾駐在・再訪記

一般財団法人
ベンチャーエンタープライズセンター
理事長　市川　隆治

1．台湾駐在時期

2002 年から 2006 年の 4 年間、交流協会台北事務所副代表として台湾に駐在する機会を得た。

（1）台中関係

当時は民進党・陳水扁政権まっただ中であったが、台中間の政治的軋轢とは裏腹に既に 100 万人からの台湾人ビジネスマンが大陸で活躍し、台湾と中国は経済的には切っても切れない縁となっていた。大陸に出張して台湾 IT 企業の工場を視察すると、広々とした敷地に緑豊かな大学のキャンパスのような環境で、テニスコートも何面か整備されていた。将来の工場拡張も考えて広い敷地を確保したとのことであったが、台湾の本社は古ぼけたビルでしかないというのが大方の台湾企業とのことだった。大陸は広く、台湾は小さいということを改めて実感した。上海から南京に向かうとどこまで行っても見渡す限りの平原が続くが、その距離が台湾の島の南北の距離に相当するのだ。

大陸には地域ごとに台商協会が組織され、普段から学校や道路建設に寄付金を収めているので、多少の無理は台商協会が言えば当局は聞いてくれるので、日系企業も是非我々を活用してほしいと言われたが、これが同じ中華民族だからこそできる大陸でのビジネスのコツだと感じた。

（2）台湾新幹線

駐在期間中に台湾新幹線の建設が佳境に入っていた。経緯としては初め欧州勢が落札したものを、地震に強く、電車方式であるために操車場の面積が小さくて済む等の理由で日本勢が逆転受注したもので、ベースには欧州方式が色濃く残っており、日本の技術陣は日本の新幹線を欧州方式の仕様に順応させるのに大変苦労したと聞いた。当時新聞では「欧日混血」と書かれていた。運転席のボタンの数とか位置は、台湾側の発注に基づき日本の新幹線のものとだいぶ違うものになっており、そういうこともあって運転士の日本での養成ができず、営業開始から数年は俸給が相当高いフランスの TGV の運転士を雇うはめになった。また、日本のものではないフランス製の券売機とかオーストラリア製の洗車機とかには当初不具合が出たようだ。離台直前には計器類を積み込んで走る試験走行にも同乗できた。交通部長も乗り、メディアに対し、走行中でもテーブル上のコインが倒れないことを示し、乗り心地がいいことをアピールしてくれていた。

（3）大地震と原子力政策

当時、日本の原子力政策についてあるセミナーで一生懸命練習した中国語で説明したことがあることを思い出す。まだ原発が順調だった頃のことである。その後 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で状況は大きく変わってしまった。大震災に対する義捐金については台湾から断トツの多額が贈られたことは記憶に新しいところであるが、これには経緯があると思う。

赴任間もない頃、台湾中心部の南投県に出張する機会があった。何の準備や予備知識もないまま

式典に参加したところ、地元の町長さんから日本には大変感謝していると花束を贈呈された。これは1999年9月21日のマグニチュード7.6の集集大地震の際、日本がいち早く救急隊を派遣し、大変助かったことに対するお礼ということであった。震源地の小学校の校庭はちょうど真ん中に1メートル強の断層ができ、平らであるはずの運動会のトラックが見事に分断されてしまっていた。校舎も、位置と揺れの方向から被害が全く異なったが、一番被害を受けた校舎は1階部分がくしゃけていた。もちろんこのときは前任者のときで、彼によれば台北市内も大きく揺れ、アパートのエレベーターも止まってしまい、11階の部屋まで階段で上がるしかなく、大変な思いをしたそうである。台北市内でもビルが倒壊し、空き地となっているところも私の赴任時にはあった。古代、台北の辺りは湖であり、その後水が干上がって盆地となったため、地盤が軟弱であるということも聞いたことがある。

3.11に対する多額の義捐金は、このときのお返しという意味もあると思う。お互いに地震国で、一方が被災したときは他方が助けるという美しい関係が日台間にはあると思う。しかし、3.11の影響は台湾の原子力政策にも色濃く反映され、延び延びになっている第4原発の建設はストップしている。

現在ベンチャー企業が果敢にロボット開発に挑戦しており、瓦礫の中の生存者を発見するのに、例えば蛇型ロボットは小さな隙間さえあれば中に入っていけるので、有望と思われる。

（4）台北101ビル

その頃、世界で一番高いビルだった「台北101ビル」も日本の技術で建てられたものであり、住んでいたアパートの玄関を出たところでちょうど見えたので、毎日少しずつ高くなるのを見守っていた。熊谷組が中心となり、エレベーターは世界最高速のギネス記録を持つ東芝製。余りに速いので耳がツンとしないように電子制御の空気圧調整装置がついている。ビル全体については、オフィス面積が広すぎてなかなか床面積が埋まらなかったと聞いている。地震について聞いてみると、鉄の杭を地中奥深く、岩盤まで到達させてその上に建てているので、台北中のビルが倒れてもこのビルは大丈夫との答えが返ってきた。また、揺れを吸収するための巨大な鉄球が上層階に設置され、見学もできるようになっている。

当時建設中であった大規模施設としては名古屋近郊の中部新国際空港（セントレア）もある。天気が良ければ日台間を往復する飛行機の中から、海上に枠が作られ、だんだん埋め立てられていく様子を見ることができて飛行機に乗るのが楽しみだった。

（5）東南アジアと台湾

駐在期間中に大陸以外にも、台湾人が活躍している東南アジア各国を訪問することができた。特に印象に残っているのはベトナム南部の商業都市ホーチミンである。台湾でもスクーターの多さには驚かされたが、ホーチミン中心部ではスクーターと自転車の海の中を車が何とか泳いでいるのではないかと思われるほどであった。しかし、少し郊外に出ると舗装もなくなり、お世辞にも立派とは言えないあばら家でものを売っている光景が続く。そんな中で台湾人実業家は私財を投じて工場団地を整備し、日系をはじめとした外国企業の受け入れを目指していた。

当時JETROホーチミン事務所と連携して日台ビジネスセミナーを開催したところ盛況となり、特に台湾人ビジネスマン側からは、普段は敷居が高くて会えない日系企業幹部とセミナーの場で面会することができ、ビジネスのとっかかりを作る

ことができ、大変有意義であったとのうれしいコメントを頂いた。

東南アジアや世界中に華僑のネットワークがあり、困ったときにはお互いに助け合う仕組みとなっているようであるが、日本の研究者によれば、決して過大視してはならず、華僑と一口に言っても台湾系、広東系、客家系等々、いくつかの系列に分かれ、それぞれの中には厳しい上下関係があり、内紛もあるということである。

（6）2004年総統選挙

在任中1回だけ2004年に総統選挙を観察する機会を得た。2000年に政権交代を果たした民進党の陳水扁・呂秀蓮組対国民党の連戦・親民党の宋楚瑜組の戦いであった。

民進党側は二・二八事件に合わせて2月28日に100万人超を動員して台湾の北から南までを人間の鎖でつなぐ（手をつなぐ）パフォーマンスを挙行した。これはソ連支配下のバルト3国が静かな抗議として実施していたものを手本としているが、文字通り静かで、台北市内にも人間の鎖がつながったが、通行人が通ろうとすると道を開けてくれていた。

これに対し、国民党・親民党側のデモンストレーションは賑やかであった。台北市内の目ぬき通りを総統府に向けて行進したのだが、トラックに乗せた大きな太鼓をドーンドーンと叩きながら進むので、お腹にも響くような感じであった。

投票日前日に遊説中の陳水扁と呂秀蓮の乗った車が銃撃され、陳水扁が腹を縫う負傷を負い、呂秀蓮も足にかすり傷を負うという事件が起きた。これで選挙の流れが変わったという分析をする人もいる。

投票率は80.28％と日本では考えられないくらいの高率で、結果は得票率でわずか0.22％の差で陳水扁・呂秀蓮組が辛勝した。この後銃撃は自作自演ではないかとの抗議もあったが、票の数え直しをしても結果は同じであった。

余りに国民の関心が高く、かつ、その差がわずかであったため、社会的にいろいろの問題が出たと言われている。両陣営のどちらの運動に参加したのかがある程度分かってしまうので、夫婦間や親子間、友人間で口論になったという報告もあった。

いずれにせよ台湾人の選挙好きを認識できて興味ある選挙であった。

（7）日本人は匠、台湾人は商人

一般論だが、「日本人は匠、台湾人は商人」というのが4年間の台湾駐在の結論だ。日本人は技術にこだわり目指す技術レベルに達しない限り研究開発を遠々と続けるのに対し、台湾人は適当なところでとにかく商品にして売りさばき、その儲けで次のビジネスを手掛けるというスタイル。日本のベンチャーがいまいち大きな成長機会を逸しているのも事業化に対する台湾人のような情熱に欠けることに原因があるのではないかと最近考えている。従って、匠の日本人と商人の台湾人がうまく連携すれば眠れる技術も宝の山に変わるのではないかと大いに期待される。

2．第1回台湾再訪

2006年に帰国して以後、なかなか台湾と接点のあるポジションに就かなかったため、8年間のブランクができてしまった。しかし、昨年4月下旬、再び台湾を訪れる機会を得た。

（1）インフラの発展

国際線は桃園国際空港に集中させていたものが、羽田-松山便ができ非常に便利になった。桃園国際空港からはバスで台北市内まで50分くらいかかったが、松山空港は台北市内北部にあり、しかも8年前はMRTが空港まで到達しておら

ず、タクシーか路線バスでホテルに向かうしかなかったが、今はMRTと直結している。

かつて住んでいたアパートの近くで、1施設当たりでは台北1売上があると言われる太平洋SOGOデパートが、すぐ隣接地にさらに大きな新館をオープンしていた。タクシーで通りかかり、最初に新館が目に入り、こんなに大きかったかなという印象とともに、位置関係がおかしいなと感じたが、聞いてみると8年前にはなかった新館であった。一方、当時から新光三越デパートは台北市役所近くにどんどん新館を建設し、勢いが良かったが、現在では台湾全土で13か所を数えるまでになっているということであった。台南にも台湾新幹線駅の小ぶりの店舗に加え、町の中心部に大型店舗を構えていた。台湾駐在当時にはじめて台北市内に新設され、洒落た感じのショッピングモールとしてよく利用していた微風広場も4店舗に拡大している。ちなみにコンビニはセブンイレブンが5千店舗、ファミリーマートが3千店舗弱と過当競争とも言えるほどの盛況ぶりである。

台北市役所近くの高層ビルから眺めると、新しい高層ビルができているのと、国父記念館のすぐ裏に巨大なドームを建設中なのが目に入った。高雄市には台湾新幹線で行ったが、8年前ようやく試運転にこぎつけたものが立派に営業運転をしていた。

このようにインフラ面では台湾の新たな発展の息吹を感じることができた。

（2）航空機部品産業

その高雄では航空機部品製造業の中小企業2社を訪問した。いずれも工場拡張中で、設備についても1台1億円は下らないマザック等の精密工作機械を230台も揃え、高精度精密部品製造を実践していた。航空機部品製造にはボーイングやエアバスの厳しい品質検査をパスしなければならないが、両社ともたくさんのそうしたCertificationを壁に掲げていた。つい7年前は町工場であったということであるが、短期間のうちに膨大な設備投資により急成長した。これぞentrepreneurshipであり、安定を好む日本の中小企業オーナーとは

訪問したうちの一社、「晟田科技工業肢份有限公司」

たくさんの国際認証が高品質の証明

対極の台湾企業の神髄を見た気がした。台湾ではファウンドリーをはじめとした半導体産業がつとに有名で、そちらはスマホの頭打ちで少し調子が悪いようであるが、航空機部品のような新分野で成長株が出てきたということである。

（3）台湾の葬儀

知人がなくなり、葬儀にも出席できなかったので、ご遺族に無理を言って墓参りをさせてもらった。台湾のお墓は地べたに置かれた小ぶりの家の形をしており、結構カラフルである。そのような伝統的なお墓を想像していたところ、全く違っていた。連れて行ってくれたのは、台北を見下ろす北部の山の中にある20階はあろうかという立派なタワーであった。中には厳かな仏像があり、上の階には骨壺を入れるロッカーがずらりと並んでいた。遺族が受付で鍵を受け取ると、当該番号のロッカーの扉を開けることができ、故人を懐かしみながら手を合わせることができる仕組みとなっている。伝統的には葬儀で紙幣に見立てた紙を燃やす風習があると聞いていたが、その伝統は生きていた。台湾元札、日本円札、米ドル札、ユーロ札に似せた「冥土銀行」の札束や紙製のシャツや靴や自動車、はてはビール、タバコ、スマホ、化粧道具や金の延べ棒を売っており、故人があの世で困らないようにそれを専用の竈で遺族が燃やすようになっていた。

3．第2回台湾再訪

さらに昨年11月上旬にもう一度台湾を訪れることとなった。今回はいろいろな「台湾○○の父」と称される先人の偉業を学ぶ機会となった。

（1）台湾蓬莱米の父

台湾大学のキャンパスの一隅に「磯小屋」がある。1925年に建てられ、昨年蓬莱米命名88周年の“米寿”を祝った「舊臺北高等農林學校作業室」である。それは「台湾蓬莱米の父」と讃えられる磯永吉博士（1886-1972）と「台湾蓬莱米の母」と称される末永仁（すえながめぐむ）技師（1886-1935）の木造の研究室で、建物のみならず中には机や手回し計算機や謄写版なども当時のまま残されている。当時の在来米は日本人の口に合わなかったため、改良を重ね「蓬莱米」と総称される現在の米を作り上げたということだ。3～4千年前の炭化した米の標本もあり興味深かった。元来、米は今より小粒で、稲の先端のひげが10センチ位長かったということだ。そこから長年の品種改良で現在の米ができあがっている。奇美実業の許文龍氏によるおふたりの彫像が飾られていたが、氏は「その土地に功績のあった人は敬意をもって記念すべき」との考えでこれを寄贈したということである。幸運にもその2日後に当のご本人と台南のご自宅で面会することができた。

（2）嘉南大圳の父

「嘉南大圳の父」は烏山頭ダムを建設した八田與一技師（1886-1942）である。当時最先端のセミ

八田與一技師の銅像

ハイドロリックフィル工法によって建造された同ダムは1920年～30年まで10年の歳月をかけて竣工したが、これにより荒地であった嘉南平原を灌漑し、9万ヘクタールの農地を出現させ、嘉南平原を台湾最大の穀倉地帯とし、現在もなお満々と水を湛えて立派に機能を果たしている。八田記念公園には八田宅をはじめ、技師たちの宿舎が復元されているが、中に同姓の市川宅があったのが面白かった。ダムの一番高い所に八田與一技師の銅像があるが、台北在任中に訪れた際にはまだ何もなく、ここに将来銅像が建立される予定との説明を受けたのを思い出した。

（3）台湾糖業の父

「台湾糖業の父」は『武士道』で有名な新渡戸稲造博士（1862-1933）である。新渡戸は同郷の後藤新平民政長官から請われ、1901年に台湾総督府の技師に任命され、「糖業改良意見書」を提出し、台湾における糖業発展の基礎を築いた。高雄市橋頭區橋南里のその名も「糖廠路24號」という住所に1901年に設立された台湾で最初の新型機械製糖工場がある。輸入砂糖に押された今はもう稼働しておらず、「台湾糖業博物館」として当時を偲ばせている。サトウキビの運送、圧搾、洗浄、蒸留、結晶、分解から包装に至る全生産過程を分かりやすく写真や絵、さらには映像で説明している。大がかりな機械修理工場もあり、自分たちで故障した機械の修理や機器改善の設計をしていたということである。木造瓦屋根平屋の日本時代の工場長宿舎も残されている。場内案内途中に防空壕があり、垂直の竪穴を梯子でよじ登る場面もあった。

各地のサトウキビ畑からサトウキビを運んだ機関車

（4）許文龍氏との会見

そうした日本の明治・大正時代の偉人たちの偉業に思いを馳せるのとは別に、台湾の実在の偉人、許文龍氏と台南のご自宅で会見する栄誉に浴した。氏は奇美実業のABS樹脂の成功、また、最近では奇美電子のテレビの液晶パネルの成功にもかかわらず、そのご自宅は台南の民家がひしめく中にあり、とてもそのような富豪の家とは思えない質素なものであった。地元のガイドさんも氏の名前は知っていたがそこがご自宅とは想像もできなかったと語っていた。「自分の事務所とか住まいは簡単でよく、別に自分を偉く見せる必要はない」というのが氏のポリシーである。また、外来政権の国民党の治世に比し、日本統治の50年間のインフラ整備をはじめとした「領土の延長」としての治政を評価し、現在の日本人もその歴史をしっかり学ぶべきと指摘された。

儲けたお金の使い方については、従業員、医療

壮麗な佇まいの奇美博物館

そして文化のために使うという氏独自の３分割法という考え方があるということであった。医療については既に３つの病院を創設し、この度文化事業ということで、30年間のコレクションを展示する「奇美博物館」が建設され、そのヨーロッパの城を思わせる立派な佇まいには圧倒された。左右対称の庭園に置かれた彫刻だけで10年かけてイタリアの専門家に依頼したということだ。中の展示品もバイオリンや絵画、動物の剥製をはじめとして氏の趣味を色濃く反映したものとなっている。

インタビュー録の中で氏は、ものごとは一面だけではなく、「その前後にある問題をひっくるめて全体的に相互連関的に考える」必要があり、「生態学的に」みなければならないと指摘しているが、これは正に現在我が国においてベンチャーに関して「ベンチャーエコシステムの確立」を議論しているのと相通ずるところがあると思った。

台湾内政をめぐる動向（2014年12月上旬～2015年1月上旬）

「九合一」選挙後の情勢と陳水扁前総統の「仮釈放」

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

2014年12月25日に直轄市6市を含む22の新県市長が就任した。また同日地方議会の議長選挙が行われ、国民党が17ポストを獲得し圧勝したが、民進党は数的に優勢だった新北、台南を落とすなど3ポストの獲得にとどまった。

2008年に収賄罪などの罪で6年以上、収監されていた陳水扁前総統が、病状悪化を理由に在宅での治療が認められ、「仮釈放」された。馬英九主席の引責辞任に伴う国民党次期主席選挙には、朱立倫新北市長だけが届出をし、朱市長の主席就任が事実上確定した。

一、直轄市長を除く統一地方選挙の結果

本誌12月号で直轄市長選挙の結果につき報告したので、今月は他の注目された県市長選挙、議員選挙、議長選挙などの結果につき報告する。

1．北部地域

基隆市

国民党陣営が分裂選挙となった基隆市は民進党が17年ぶりに奪回することになった。前回民進党が勝利したのは、藍軍陣営の分裂により、民進党候補が漁夫の利を得て勝利したが、今回勝利した林右昌の得票率は53%と、分裂した藍系候補2人の合計得票率44%をはるかに上回る圧勝となった。

新竹市

民進党は同市を1997年以来、勝てていない「艱困選挙区」とみなしてきた。今選挙で、民進党は現職市議を公認候補に立てたが、奇しくも1997年の選挙で民進党候補として勝利した蔡仁堅元市長が無所属候補として出馬したことで、もともと劣勢な緑陣営の分裂により、国民党現職の許明財の優勢が予測された。しかし、蓋を開ければ林市議が、得票率0.51%、約1000票差という僅差の大逆転勝利を果たし、筆者にとっては、桃園市に次ぐサプライズ選挙区となった。なお林氏は39歳という今選挙での最年少市長となった。

2．中部地域

彰化県

国民党、民進党ともに最重要選挙区とみなした台中市は民進党が圧勝したが、同様に「一級選挙区」と位置づけられ、当初は大接戦が予想され注目を集めた彰化県は、民進党の魏明谷委員が得票数で10万票差、得票率でも14%以上の差をつけて圧勝した。魏明谷氏は投票直前に立法委員を辞すなど背水の陣で臨んだことが、有権者を刺激したと報じられた。

南投県

南投県は、国民党の林明溱立法委員が民進党の李文忠元立法委員を得票率1.9%という僅差で振り切った。呉敦義副総統の地元で国民党には負けられない選挙区であったが、同党は中部全滅の危機を回避し、どうにか面目を保つことができた。

3．南部、島嶼部

嘉義市

張博雅現監察院長が1983年に同市長に当選し

て以来、同市では女性が30年以上市長を努めており、今回も「伝統」を守るべく国民党は、アナウンサー出身の陳以真元青年輔導委員会主任委員を候補に立てた。一方､民進党の涂醒哲候補は｢陳以真に投票することは、馬英九を支持することになる」などの「反馬感情」を巧みに利用した宣伝作戦を展開したのが功を奏したのか、投票直前まで民進党関係者は｢嘉義市の惜敗は仕方ない」と、党内でも半ば諦めモードが漂っていたにもかかわらず、最後は「逆転勝利」の結果となった。

澎湖県、金門県、連江県

澎湖は長期にわたり国民党が執政してきたが、民進党候補が1993年以来の勝利を収めた。今回の県市長選挙で最多の10人が乱立した金門県長選挙は、元立法委員の無所属候補が国民党公認の現職を退けた。馬祖島のある連江県長選挙は、国民党が二人の候補を実質上公認する形で争われたが、新人候補が現職を破り初当選した。

二、県市議員及び議長選挙の結果

1．直轄市議員選挙

直轄市議員選挙は、6都市の当選議員数は民進党が167名と国民党の151名を抑えて「第一党」となった。（表2）

台北市長選挙で国民党は大敗したが、市議員の議席は僅か1議席だが民進党を上回り第1党の座を守ったが、民進党は公認候補27名全員が当選する予想以上の戦績を挙げ､｢柯文哲ブーム」に上手く乗ることができた。

新北市長選挙では惜敗に終わった民進党だが、市議選では第一党の座を確保し、友党の台聯を加えれば過半数議席を確保し議長ポストが狙える位置につけた。

台南市は、民進党が28議席を獲得し、友党及び緑系無所属を合わせると過半数議席を突破しており、議長ポストの獲得が有力視されている。

高雄市は、民進党が単独過半数議席を獲得し、台南とともに南部の完全執政が現実味を帯びるこ

表1　直轄市以外の首長当選者、得票率党

県　市	当選者（現（元）職）	政　党	得票率	投票率
基隆市	林右昌（前党副秘書長）	民進党	53.15%	63.92%
宜蘭県	林聡賢（宜蘭県長）	民進党	63.95%	70.46%
新竹市	林智堅（新竹市議員）	民進党	38.36%	62.90%
新竹県	邱鏡淳（新竹県長）	国民党	46.94%	68.76%
苗栗県	徐耀昌（立法委員）	国民党	46.59%	72.80%
彰化県	魏明谷（立法委員）	民進党	53.71%	72.93%
南投県	林明溱（立法委員）	国民党	50.96%	73.11%
雲林県	李進勇（元基隆市長）	民進党	56.98%	74.09%
嘉義県	張花冠（嘉義県長）	民進党	63.09%	74.19%
嘉義市	涂醒哲（元立法委員）	民進党	51.41%	70.96%
屏東県	潘孟安（立法委員）	民進党	62.93%	73.53%
花蓮県	傅崐萁（花蓮県長）	無所属	72.38%	61.77%
台東県	黄健庭（台東県長）	国民党	54.40%	67.82%
澎湖県	陳光復（元立法委員）	民進党	55.34%	66.27%
金門県	陳福海（元立法委員）	無所属	52.76%	45.15%
連江県	劉増応（医師）	国民党	66.24%	67.05%

表２　直轄市議員の政党別当選者数

	台北市	新北市	桃園市	台中市	台南市	高雄市	合計
民進党	27	32	20	27	28	33	167
国民党	28	26	29	28	16	24	151
台聯	1	1	1	—	1	1	5
親民党	2	—	—	2	—	1	5
新党	2	—	—	—	—	—	2
無所属	3	7	9	6	12	5	42
合計	63	66	60	63	57	66	—

表３　主要政党の地方公職当選者数

政党	県市議員（直轄市除く）	郷鎮市長 原住民区長	郷鎮市、原住民 区民代表	村里長
中国国民党	235	80	542	1794
民主進歩党	124	54	194	390
台湾団結聯盟	4	—	—	1
親民党	4	—	—	1
無所属等	161	68	1405	5659

ととなった。

２．基層レベル選挙の結果

表３は県市議員以下の政党別獲得議席である。基層レベルの民意代表は、依然として国民党が数的な優位に立っている。

また第三政党の座を争う台湾団結聯盟と親民党は、両党とも直轄市５、その他県市４議席の計９議席を獲得した。

表４　直轄市正副議長と所属政党

都市	議長	副議長
台北	呉碧珠（国民党）	陳錦祥（国民党）
新北	蒋根煌（国民党）	陳文治（民進党）
桃園	邱奕勝（国民党）	李曉鐘（国民党）
台中	林士昌（国民党）	張清照（国民党）
台南	李全教（国民党）	郭信良（民進党）
高雄	康裕成（民進党）	蔡昌達（民進党）

資料元：「五都市正副議長名単」『自由時報』（2010 年 12 月 26 日）頁１。

３．地方議会議長選挙

12 月 25 日に新県市長が就任した。同日行なわれた議長選挙では、国民党が 17 ポストを獲得して圧勝した。一方で、首長選挙で 13 ポストを奪った民進党は、台北、新北の両市で接戦の末敗退した他、市長選では圧勝した台南で国民党に敗れる波乱があり、同党籍の議長は高雄市、宜蘭県、嘉義県の３ポストの獲得にとどまった。（表４）

頼清徳市長施政下の台南議長選挙は民進党と友党の台聯の議席だけで過半数を超えており、複数の緑系無所属議員も抱き込めば、民進党の楽勝が予測されたが、結果は少なくとも５人の民進党議員が造反したことで、国民党の李全教元立法委員が当選することとなった。報道では、この議長選挙をめぐり、「一票一千万元の賄賂が流れた」との怪情報も出るなど選挙中から検察が収賄取締りに動く、台湾政治の変わらない一面を確認させられた。また、民進党は台南議長選挙における造反議員５名に対して、12 月 31 日に開催した中央評議会で党籍剥奪処分を下した。

今選挙の結果、民進党が 13 県市長ポストを獲得した一方で、国民党が 17 の議長ポストを奪取

するなど、今後４年の地方政治は、「緑軍施政、藍軍監督」といったある種のチェック＆バランスが働く体制となった。

４．選挙における収賄と当選無効訴訟

昨年 11 月の統一地方選挙は、選出された公職人数の規模が空前であっただけでなく、収賄の深刻さも空前のレベルであったとの指摘がされた。全国の検察機関は選挙中から捜査を行い、１月６日には県市議員 29 人、郷鎮市区長８人を含む 167 名の公職当選者に当選無効を提訴した。提訴された中には、上述の台南議長に当選した李全教氏、民進党籍前立法委員の郭栄宗桃園市議などが含まれている。

三、世論調査から見た「九合一」選挙

今回の統一地方選挙は、事前の世論調査から、国民党の苦戦は予期されたが、桃園市の敗退、新北市の大苦戦は「跌破眾人眼鏡」（注：皆の眼鏡を割るほどの驚き）と例えられほどの衝撃があった。『聯合報』は 12 月 17 日の特集記事で今選挙を回顧し、「世論調査は、予測を外したのか？」とする特集記事を組んだ。表５から表８は、各メディアが選挙前に報じた直轄市長候補の支持率と実際の得票率の結果を記したものである。

表５、６は台北市、台中市の得票率の差であるが、台北市の場合は各メディアが柯文哲が 11-18％のリードを報じたが、実際の得票率は 16％台と比較的近く、また台中市に関しても、林佳龍のリードが３-16％と幅のある調査結果であったが、実際の差は 14％台とこれも比較的近かった。

一方で表７、８は、各メディアが大きく予測を外した新北、桃園である。新北に関しては、支持率調査で 12-27％の大差がついていたが、朱市長は 1.28％の僅差での再選であった。桃園に関しては、３-24％もの大差の予測で国民党現職の勝利を予測したが、実際には得票率３％差でまさかの敗退を喫した。

台湾の世論調査は、主に夜間の時間帯（通常 18-22 時前後）に固定電話のある家庭を対象として実施しているが、批判者からは「夜間の時間帯に若者は自宅にはいない」、「今時の若者は、固定電話など持たぬ者が多い」等の理由を挙げ、台湾メディアの行う世論調査には若年層の投票意向が反映されていないとの指摘がなされてきた。

しかし、今回の世論調査と実際の結果の違いについては、「若者層のサンプル洩れ」の指摘は、予測が大きく外れた新北、桃園では有用かもしれないが、事前調査との数字が比較的近かった台北、台中の結果は説明しにくい。

選挙の世論調査に詳しい洪耀南氏は、今選挙で世論調査の予測が大きく外れた最大の要因は投票率にあったと指摘している。「接戦」が予測された台北、台中は全国平均投票率の 67.59％を上回り台北 70.46％、台中 71.83％を記録したが、「国民党の楽勝が予測された」新北と桃園の投票率は 61-62％台と平均値を大きく下回った。これは、前回の選挙では国民党候補に投票した多くの有権者が棄権したとの推測が可能であると指摘された。

選挙期間中に柯文哲陣営幹部の姚立明元立法委員が「柯氏は 80 万票は取るだろう」と豪語し、相手陣営やメディアから「盛りすぎ」、「いい気になりすぎ」だと批判、揶揄されたが、実際には 85 万票を獲得して溜飲を下げた。柯陣営が「80 万票獲得できる」と豪語した自信の背景には独自に実施していた世論調査で調査対象の母数を台湾で一般的に行われている千人から三千人に引き上げたことで調査の精確性が増したとの見解を示した。

世論調査の精確性を高めるためには、サンプル母数を引き上げるか、携帯電話にも聞き取りの範囲を広げることが検討されるべきであるが、携帯

表５　台北市長選挙の支持率調査と実際の得票率の差

	媒体	聯合報	蘋果日報	中国時報	自由時報	TVBS	三立	結果
台北市	日付	1116	1116	1108	1116	1117	1108	1129
	柯文哲	42	40.1	46.9	44.27	45	46.6	57.16
	連勝文	28	28.6	30.2	25.66	32	29	40.82
	差	14	11.5	16.7	18.61	13	17.6	16.34

表６　台中市長選挙の支持率調査と実際の得票率の差

	媒体	聯合報	蘋果日報	中国時報	自由時報	TVBS	三立	結果
台中市	日付	1116	1116	1111	1113	1116	1117	1129
	林佳龍	43	41.3	43	44.06	44	43.4	57.06
	胡志強	31	32.5	40	28.38	35	32.9	42.94
	差	12	8.8	3	15.68	9	10.5	14.12

表７　新北市長選挙の支持率調査と実際の得票率の差

	媒体	聯合報	蘋果日報	中国時報	自由時報	TVBS	三立	結果
新北市	日付	1116	0924	1112	0704	1103	−	1129
	朱立倫	49	45.7	45.4	44.07	49	−	50.06
	游錫堃	22	22.9	33.5	28.99	28	−	48.78
	差	27	22.8	11.9	15.08	21	−	1.28

表８　桃園市長選挙の支持率調査と実際の得票率の差

	媒体	聯合報	蘋果日報	中国時報	自由時報	TVBS	三立	結果
桃園市	日付	1113	0710	1108	0822	1111	0704	1129
	吳志揚	49	42.63	46.2	40.72	49	44.3	47.96
	鄭文燦	25	39.6	21.8	32.03	30	23	51
	差	24	3.03	24.4	8.69	19	21.3	-3.04

電話所持者へ調査の範囲を拡大した場合には、従来調査の６倍のコストがかかるとも指摘され、台湾メディアが採用する可能性は高いとはいえない。

したがって、以前から指摘するように特定の台湾メディアが実施する世論調査を妄信することは絶対に避ける必要があるが、それらの調査結果を全く無視できるほど独自の情報リソースを持たない筆者のような人間にとっては、複数の調査を参考にしながら、より客観的な台湾の世論の流れや政局の雰囲気を把握し、引き続き対外発信していく必要性を痛感するところである。

四、陳水扁前総統の在宅療養

１．在宅療養に至る展開

2008 年 11 月に収賄等の疑いで身柄を拘束され、2010 年に土地取引にかかる収賄案で懲役 20 年の刑を受け、服役中の陳水扁前総統の健康問題は、民進党の要人が陳前総統と会見後に「深刻な健康状態にある」などの情報をマスコミに伝える度に、「人道面」、「政治面」など様々な理由をつけて、「釈放すべきである」等の主張がなされてきた。2010 年以降、民進党の一部関係者や親族からは、同氏の病状悪化を理由に政府に対して「在宅療養」

を求めてきたが、馬総統は一貫して「陳氏には解決していない訴訟案件が複数残っている。在宅療養する条件にも合致しない」として、実質上拒否してきた。

しかし、2013年には数度にわたり、陳前総統が獄中で自殺を図ったとの消息が報じられるなど、国民党陣営にも郝龍斌前台北市長など一部要人には、与野党対立の緩和を促進するとの政治的観点、医療面での人道的な観点から、陳氏の在宅療養を考慮すべきとの声が存在していた。

2．在宅療養に向けた動き

統一地方選挙後の12月3日、民進党は蔡英文主席が主催した中央常務委員会に13人の新首長を招き拡大会議を開催し、「地方が中央を包囲する」との戦略を開始すると号令した。その際に、党報道官から、「人道上の観点から陳水扁氏の在宅療養を認めるべき」との呼びかけが行なわれたほか、頼清徳台南市長は、「与野党和解の観点から、陳前総統を釈放することは道理がある」と述べるところがあった。

翌4日、蔡主席は自ら、陳氏が収監されている台中監獄を訪問し、その後メディアに対し「選挙後、久々に前総統と接見したが。病状は悪化しており、失禁、よだれを流すなどの症状もみられ、パーキンソン病の症状も見られる」とし、「人道、人権及び医療の専門的立場から、政府は同問題を正面から取り組むべきである」との発言がなされた。

このような流れを受け、12月9日当地主要各紙は、羅瑩雪法務部長が、「陳氏は再び高等裁判所に在宅療養の要求を申請すれば、法務部は専門の医療団による鑑定を行い、在宅療養すべきか否かの判断を下すことができる」旨説明したと報じた。同部長の発言は、馬総統が国民党主席を辞任し、急速に指導力、影響力が低下する中で、野党民進党を含む台湾社会との融和を図る必要性に駆られ、従来の強硬姿勢を修正するなど、台湾メディアは政治的な力が作用したのではないかと分析した。

12月中旬には台中監獄と陳氏家族がそれぞれ推薦する医療関係者から構成された医療団のリストが発表されるに至り、当地マスコミでは「阿扁は旧正月は自宅で過ごせるであろう」との見方が広まっていった。陳水扁の「戦友」を自認する呂秀蓮元副総統が28日から抗議のハンストに突入する中、12月29日には、医療鑑定団が三度目の会議を行い、陳氏の在宅療養を提案する結論を出すに至った。その後、法務部の事務的な手続きを経て年末年始連休明けの1月5日に、自宅療養を認めると発表し、陳前総統は同日中に高雄の自宅へと帰宅した。

今回の決定に関し、法務部政務次長は、「陳前総統は無罪釈放や刑期満了による出獄ではなく、暫時的な在宅治療措置であり、在宅期間中は刑期に含まれない。またもし、陳前総統が関連規定に違反したり、病状が改善した場合は、直ちに監獄に戻らねばならない」と述べ、「釈放」ではなく引き続き当局の監督を受けることを強調した。その一方で、医療チームが陳前総統を診察し、病状が改善していないと判断を下せば、在宅治療期間を今後も1－3ヶ月延長を継続することは可能であるとしており、監獄のベテラン関係者は、「在宅療養は、時限付だが、現在の社会の雰囲気を考えると、阿扁のこの時点での在宅療養は釈放に等しいのではないか」とのコメントが報じられた。

民進党は、吳釗燮秘書長が同日「民進党は長期にわたり、政府に対して人道的観点から、党常務委員会などのレベルで計10回も在宅療養を呼びかける声明を発表してきた。しかし、今回の政府の決定は、遅かったとはいえ、肯定できるものである」とのコメントを出した。また、翌6日に吳秘書長は自ら陳前総統を見舞うなど、引き続き陳氏の動向に関心を向けていくとの表明がなされ

た。

3．今後の見通し

陳氏の在宅療養に関し、陳氏本人の肉声は聞かれず、子息の陳致中氏が、「台湾各界への感謝の意を申し上げるとともに、しっかり療養させる」とのコメントを発表したほか、台湾の各メディアからの取材依頼に対し、「三不規定」（インタビューを受けない、公式な談話を出さない、政治活動には参加しない）を遵守するとして、治療に専念する旨強調するなど、ローキーな対応に終始している。

今回の措置に対して台湾社会には、緑系支持者を中心に「台湾社会の和解を後押しする」と歓迎ムードが広がる一方で、藍軍陣営には、洪秀柱立法院副院長などは、「陳氏の犯罪は確定したものであるにもかかわらず、一部の台湾世論には無罪なのに不当に収監されているかのような誤った印象がある」として、一部世論の雰囲気に疑義を呈するなど、陳氏に対して「汚職の犯罪者」、「台湾住民への謝罪が無い」と不満を抱いている人も多く、今回の措置が台湾社会が和解の方向に向かっていくのを後押しするか否かは現段階では判断し難い状況にあることを指摘したい。

五、国民党主席選挙の動き

統一地方選挙敗北を受けて引責辞任した馬主席の後任の座をめぐり、「ポスト馬」の座を伺う権力闘争が勃発した。馬主席が正式に辞任する前から、郝龍斌、吳敦義の両名が党副主席の辞任を表明したが、特に呉副総統は有形無形の「陰謀を企んでいるのではないか」との指弾を受け、馬総統本人の説得もあり副主席辞任を撤回するなど混乱を極めた。このように党内有力者間の駆け引きが強まる中、次期主席の人気にあやかり選挙で有利に戦うことを望む立法委員たちは、党勢を回復できる唯一の人材として朱立倫新北市長に白羽の矢を立て、12月11日には34名の立法委員が連署で朱市長に対し次期主席選挙出馬を促す行動に出た。朱市長の動向に注目が集まる中、同人は翌12日に満を辞して自身のフェイスブックで党主席への出馬を言明し、同日メディアの取材を受け「5項目の憲政改革に関する主張」、「3項目の党務改革」、「2つの承諾」を表明した。

「5項目の憲政改革主張」では、①内閣制への移行を主な内容とする憲法修正に関する住民投票と2016年総統選挙との同時実施の推進、そして最も早ければ、2020年からの内閣制への移行②選挙権の現行20歳から18歳への引き下げ③比例代表区獲得議席の最低得票率を現行5％から3％への引き下げ④不在籍投票制度の推進⑤立法委員選挙制度改革を掲げた。ここでは、民進党陣営を刺激しないように、2020年以降の内閣制実施を強調した他、民進党も反対しにくい主張が並んだ。

「3項目の党務改革」では、①党資産の公開透明化②人材育成と青年層の抜擢③王金平院長の党籍確認裁判を含む問題の処理を主張した。党資産と党務改革は党員、支持者のほか、国民党に疑問を持つ人たちにも向けられた主張である。

「2つの承諾」では、①2018年の任期満了まで新北市長をやり遂げる。②2016年の次期総統選挙に出馬しないとしたが、両主張は、今回の党主席選挙への出馬と自身の総統選挙出馬問題を切り離すことを目的としたように見える。その一方で、朱市長は2016年に総統選挙に出馬しても上げ潮の民進党と勝負しても分が悪いので、今回は「一歩退却」する戦略をとったとする見方も出現した。

その後、郝龍斌、吳敦義のほか、胡志強前台中市長などの党内有力者は相次いで次期選挙への不出馬を表明し、結局選挙への正式な登記をしたのは朱市長だけとなり、この時点で朱市長の次期主席就任が内定した。それでも、年末年始にかけて

朱次期主席は、1月17日の信任投票に向けて11県市を政見発表のため遊説するなど精力的に動いている。

六、馬総統の元日演説

馬総統は元日から公務を精力的にこなした。6時半から、総統府前で毎年恒例の国旗掲揚式典に呉敦義副総統とともに参加し、国民に対し「国民が団結奮闘し、国民が豊かになり、国が強くなることで、我々の国旗も世界で肯定されることになる」と強調した。

続けて、総統府の講堂で行なわれた中華民国105年開国記念式典では、「和解、協力、和平」のテーマで演説をした。

「和解」は、社会の和解の促進として、昨年の学生運動が台湾社会に与えた衝撃を回顧するとともに、社会の相互理解を進めるためには、相手への理解が必要であるとして、「青少年、弱者への理解を過去の方法、手段とは異なるもので理解する必要があり、青年の目線と弱者の角度から未来を考えなければならない」と政府関係者に呼びかけた。

「協力」は、与野党協力の推進として、「台湾社会が現在直面している内外の挑戦、公共利益と全国民の福祉のためにも与野党は対立から協力への路を歩む必要がある」。「台湾の与野党間には深い溝があるが、今こそ双方は対話をする必要があり、台湾社会が分裂している余裕はなく、あらゆる不満のはけ口は私（馬総統）だけに向けられるべきである」と強調した。また「政局の対立状況を緩和するためにも与野党が形式にこだわることなく対話と協力を促進、推進させる事を希望し、国民に有利であれば、イシューに限ることなく、与野党関係者、民間代表が参加する『国是会議』の開催を推進したい」と述べた。

「和平」は、台湾社会が和解した上で、両岸関係の平和を確実なものとしなければならず、両岸関係の推進にあたり、両岸の平和の重要性を訴えた。ここでは、従来の「三不政策」（統一しない、独立しない、武力行使しない）と「九二共識，一中各表（92年コンセンサス、一つの中国を各自が表述）」の基礎の上に、「台湾を主体とし国民に有利である」を原則として、ECFA後の経済貿易交渉を推し進め、両岸実務機構の代表事務所の設置を推進し、両岸関係が更に平和発展を促進させたいとの希望を強調した。

昨年の元日談話は経済振興が主軸であったが、2014年が学生運動を中心とし、台湾社会の亀裂が深まり、食品安全問題が台湾社会を直撃し、そのあおりを受け選挙で大きな挫折を味わうことにより、馬総統が野党、社会勢力に対して、低姿勢で和解と協力を呼びかける姿勢が際立った。

同演説に対して民進党は鄭運鵬報道官が、馬総統の国是会議開催の呼びかけに関する内容を肯定するとともに、民進党自身も国民党を含む国内主要政党、公民団体の代表を招聘し、国是会議を開催し、台湾が直面する重要な公共イシューである憲政改革、国会改革、公民権の参与などの問題につき、コンセンサスを求め問題を解決させたいとの期待を述べるところがあった。

台日同名 32 駅・同名さん 駅長体験付台湾旅行への参加

公益財団法人交流協会
松寺　富貴子

《参加のきっかけ》

「清水」「田中」「大橋」など、台湾と日本には同名の駅が 32 駅もあり、台湾の鉄道旅行のプロモーションとして、駅と同じ名前（姓または名）の日本人が台湾に招待され 11 月 24 日から 27 日の 3 泊 4 日で、各駅の「駅長」を体験できるユニークなイベントを、台湾交通部観光局（台湾観光局）・台湾観光協会が企画し、平成 26 年 3 ～ 8 月の間に同名さんの応募を募りました。

各駅 1 名は抽選で決まります。

参加者の皆さんは新聞の広告欄を見てイベントを知り応募した方が多かったのですが、私の場合、職場の入り口に大きなポスターが貼ってあり、自分の名前（富貴）と同名駅があることを初めて知り、驚いたのと同時に、ポスターを見た職員の皆さんから「絶対当選するから応募しなよ！」と勧められ、「あまり聞かない名前だし、これはもしかして！？」と、なぜか最初から当選する予感がしつつ、応募してみることにしました。

待つこと 2 ヶ月！繰り上げ当選ではありましたが、見事予感的中！「駅長体験旅行」への参加が決定しました。

台湾には 2 度訪れ、いわゆる観光名所といわれる場所は見学していましたが、同名というだけで、まだ見ぬ「富貴駅」に不思議と親近感が湧いてきます。

＊ 1 日目＊（11 月 24 日）駅長任命式

14 時 15 分、羽田空港から出発。

17 時 15 分、あっと言う間に台北松山空港へ到着。

同じ便に搭乗していた他の駅の同名さん十数名と、集合しました。

昨年の台湾の冬は異常気象のせいか、連日気温が 30 度近くあり、セーターにトレンチコートという出で立ちで出発しましたが、大変蒸し暑い空気が出迎えてくれました。

しかし、大変天気も良く「この暑さこそ台湾だ！」と、これからの行程を楽しみに、バスで駅長任命式及び前夜祭の会場である国賓大飯店へ向かいました。

台湾を初めて訪れる参加者の方々は、日本語の看板が非常に多い町並みに大変驚き、すぐに生活が始められるような錯覚すら感じるとお話されていました。

会場でようやく、全国から参加した同名さん全 32 名が揃いました。今回の旅は、32 名を北から南まで各方面別の 7 組に分け、約 5 名ずつで移動します。

明日から私が駅長体験をする「富貴駅」のある「北西部」を一緒に 3 日間を過ごす「桃園」「富岡」「竹中」「横山」さんと、円卓を囲みました。皆さん、女性駅長さんです。

会場は私の想像を遙かに超える盛大さで、台湾

交通部次長、台湾観光局局長、台湾鉄路管理局局長、日本観光振興協会の代表者の皆様、多くの台湾のマスコミの方々が出席され、和やかな中にも「台湾の鉄道の旅の良さを知って欲しい！」という「台湾の本気」をジワジワと感じました。

各人に「駅長帽子」と「駅名の入った真っ赤なタスキ」が贈られ、１人１人、名前と駅名を呼ばれ、壇上で紹介をされます。

格好だけでも「１日駅長」になり、気分はどんどん盛り上がって行きます。

台湾観光親善大使であり、この旅行の名誉団長を務める演歌歌手の小林幸子さんも同席されており、偶然にも私と小林さんが同じ高校の卒業生であるため、図々しく旅行当選の驚きを少々興奮気味に話し掛けてしまいましたが、「おめでとう」と喜んでいただきました。

＊２日目＊（11 月 25 日）台北駅での駅長出発式から各方面へ

いよいよ２日目から、駅長体験旅行のスタートです。

朝、台北駅の中央ホールで駅長出発式があり、再び駅長 32 名が集まります。

皆、台北駅の目の前のホテルに宿泊していましたが、ホテルからホールまでは、もう「駅長帽子」を被り「タスキ掛け」で向かって下さいとのこと。

すっかり盛り上がって来た私は何の抵抗も無く、駅長帽でスタスタ横断歩道を渡りましたが、年配の男性がかなり恥ずかしがっていたのが、何とも日本人らしいなと思いました。

地元の小学生達による、歓迎の独楽回しの演技を観覧した後、小林幸子名誉団長の出発の掛け声の下、いよいよ７つの各方面に別れ駅長体験に出発しました。

【桃園駅／縦貫線北段】

〈日本の桃園駅は、近鉄・名古屋線（三重県）にあります。〉

台北駅から桃園駅に到着。

まず、「モモゾノ」という可愛らしい名字の方がいることに驚きました。桃園駅は桃園市の中心駅で、平日昼間でもホームにはたくさんの乗降客がいました。

駅員さんも多く、１日目の１つ目の駅ということで大歓迎で迎えてくれました。広い駅長室に案内していただき、大きな駅長さんの椅子に座り皆な思い思いのポーズを撮って記念撮影。

改札では、今ではもう使わなくなった切符切りをお借りして、切符切りのポーズ。

ホームで見ていた乗降客の皆さんが、私達が日本人で桃園駅に来た経緯を聞くと、切符を持つポーズをしてくれたり、一緒に楽しむことができました。

桃園駅・他駅の駅長さん達と

桃園駅は現在、エレベーター・エスカレーターがありませんが、設置作業が進んでいるとのことで、完成予想図を見せていただきました。

より快適になった桃園駅をまた見に行きたいです。

【富岡駅／縦貫線北段】

〈日本の富岡駅は、JR 東日本・常磐線（福島県）

にあります。〉

富岡駅のすぐお隣は小麦粉工場で、主に小麦などを台中港の方へ運ぶ貨物列車が多く、目の前で貨物の連結作業を見せていただきました。またその際に使う手旗信号も伝授していただき、「また１つ、駅長らしくなってきたかな？！」と、ニンマリです。

富岡駅では、駅員の皆さんがよく食べられているという豚肉と高菜を使ったお弁当を昼食に出していただきました。ランチョンマットは、富岡駅が発行した使用済みの貨物の受取書(段ボール紙)でした。ステキなアイデイアに感激し、記念スタンプ代わりにいただいて帰ることにしました。

富岡駅・駅弁とランチョンマット

富岡駅の改札を出ると、日本統治時代に建てられた家屋がほぼ残っている老街で、何とも言えない懐かしい景色が広がっています。

「多くの日本人もここで生活をしていた時代があったんだなあ」と、感慨深くなりました。

改札脇にそびえる大きなガジュマルの木がとても印象に残る駅でした。

【竹中駅／内湾線】

〈日本の竹中駅は、JR 九州・豊肥本線（大分県）にあります。〉富岡駅から竹中駅までは、発車時間の都合上、専用車で移動。

特に商店街なども無く、いたってのどかな風景

竹中駅・水牛のオブジェ

です。

到着してすぐ目に飛び込んで来るのは、黒い大きな水牛のオブジェと、盛り土の上に煉瓦を積み上げたような門が立っていました。

竹中駅のある新竹県は、客家（ハッカ）がルーツである人が大変多く住んでいる地域だそうで、水牛は客家の人々にとって共に農作業をする大切な動物であり、門は客家独特の建築様式で建てられたものだそうです。

のどかな風景とは打って変わり、竹中駅は大変近代的です。

高架駅なので早速エスカレーターを上がりホームに到着すると、なんと「山手線の駅そっくり～！」なのです。恐らく行き先を知らせる駅名標の中央に緑色の線が入っていたからだと思います。

竹中駅では電気系統のボタンがたくさんある部屋へ案内していただき、電車の通らない時刻を見計らって、ポイントでの一時停止の指示を出すボタンを試し押しさせてもらいましたが、大変緊張しました。

＊３日目＊（11 月 26 日）いよいよ旅行最終日

【横山駅／内湾線】

〈日本の横山駅は、JR 西日本・七尾線（石川県）・

神戸電鉄三田線/公園都市線（兵庫県）にあります。〉

ホテルから横山駅までは、発車時間の都合上、専用車で移動。

横山駅は無人駅です。新旧２つのホームがありますが旧ホームは列車の扉の高さに足らないので今は使われておらず、かわいらしいミニ機関車が置いてありました。

横山駅・ミニ機関車

無人駅のため、お隣りの竹中駅駅長が前日に引き続き私達に同行してくれます。そしてこの横山駅でようやく内湾線に出会えました～！　蝶やたくさんの草花が全面にペイントされているとてもカラフルな車両です。

台湾の濃い緑と亜熱帯の気候には、とても良く映えていました。

【合興駅／内湾線】寄り道駅

途中、横山駅と富貴駅の間の観光スポットになっているとゆう合興駅（無人駅）を見学。

合興駅は内湾線唯一も木造駅舎があり、かつては石灰石の積み出し駅で、内湾線最大の貨物輸送量があったそうです。また、恋人を乗せて走り出した列車を同駅から青年が追いかけたロマンテックな物語（那一年追火車男孩）が有名で、「愛情站（駅）」の素敵な別称もあります。

かつての貨物関連設備は現在、公園になってお

合興駅・恋人達の出発点

り恋愛にちなんだ可愛いらしい商品がたくさん並ぶ土産物店には次から次に観光客が訪れていました。

ちなみに、先ほど紹介した物語のお２人が後にご結婚され、現在、ボランテイアとして合興駅をお手入れして下さっているそうです。

お２人にちなんだハートマークのペイントが溢れる駅で幸せ気分を満喫しました。

「幸せになる木」に抱きついて帰って来た御利益を、期待せずにはいられません！

【富貴駅／内湾線】

〈日本の富貴駅は、名鉄・河和線/知多新線（愛知県）にあります。〉

合興駅から富貴駅も専用車で移動。

いよいよ私の名前（富貴子）と同名駅に到着です。「１日駅長として絶対に記念になる写真を残したい！」、と 30 度の気温も承知の上で、この日は紺色のスーツに白手袋着用です！

富貴駅も無人駅で、道路脇の少し小高い場所に非常ばしごのような階段があり、５、６段上がると１面１線のホームです。ホームの一番端に日本の PASMO や Suica をピツとするようなカードリーダーがポツンと立っていました。

周辺に商店や住宅は無く、恐らく今回訪ねた５駅の中で一番小さくちょっと寂し気にも映りまし

たが、私にとって特別な駅となりました。

富貴駅の５つ前に「栄華駅」があり、両駅を通れば「栄華富貴」となります。縁起かつぎの意味も込め、また再び富貴駅を訪れてみたいと思いました。写真も本物の駅長のように撮れ、この駅のために着た紺色のスーツは自分では大正解でした。

富貴駅・駅長ポーズ

【内湾駅／内湾線終着駅】寄り道駅

今回の旅行は同名駅だけではなく、周辺の観光地も訪れることができました。富貴駅のお隣は内湾線の終着駅、内湾駅です。内湾線はもともと、日本統治時代に石灰石輸送と採掘された天然ガスの搬出を目的に作られたそうで、現在では、台北から気軽に観光スポットに行けるローカル線として、親しまれているそうです。

内湾は、駅前から広がる老街を散策。

日本の縁日のような商店街を抜けると、かつて映画館だった昔のままの佇まいを残す「内湾戯院」があり、現在、古い映画を放映しているレストランとして再利用されています。

内湾駅・内湾戯院

内湾の住民の大半は客家人だそうで、ここでは客家料理を堪能しました。客家料理は家庭で作る中華料理のようで、日本人の口に大変良く合うと思います。

続いて茶芸店で客家伝統の「擂茶（レイチャ）」を体験。「擂」は研磨を意味するそうで、茶葉・胡麻・落花生等をすり鉢に入れ、油分が出てネットリするまですりこぎでこぎ、泥状になったらすり鉢にお湯を注いで、溶かしたら出来上がり。

内湾駅・擂茶作り

駅長全員で協力しながら１つのすり鉢を回して作ったお茶です。

明るく親切だった駅長の皆さんやガイドとしてずっと同行し、丁寧に案内をしてくれた交通部観

光局・台湾観光協会の皆さんに感謝をしながら、ほんのりと甘い擂茶をいただきました。

翌日の帰国のため、内湾から再び台北へ戻り、皆さんと一緒に食べる最後の夕食も終わり、「台日同名駅32駅・同名さん駅長体験付台湾旅行」の全行程が終了しました。

＊4日目＊（11月27日）帰国

帰国便では、何と応募が1名しかいなかった「日南さん」と隣になり、「日南駅に集まった皆さんからお米や農作物までいただいて、大変な歓迎を受けました」とお聞きし、違う地域でも私達と同様の歓迎ぶりだったことが分かり嬉しかったです。

各駅各駅での趣向をこらした企画を練り、駅長帽子にタスキ掛けの私達を最高に歓迎していただいた、今まで経験したことの無い旅行でした。感謝の気持ちいっぱいで帰国することができました。

《旅行を終えて》

自分の名前が御縁で台湾に招待していただき、自分と同名の駅で駅長体験をするという、大変貴重な一生心に残るであろう思い出ができました。また、ガイドブックにはあまり載っていないような場所を訪れ、新たな台湾の魅力も発見しました。

台湾の皆さんの「台湾を知ってほしい！」「ぜひ見に来てほしい！」という熱意を感じた旅です。

私の体験談を通じ、1人でも「実際に台湾に行ってみたい」、観光地を訪れたことのある方には「まだまだ知らない台湾を見てみたい」と思うきっかけになればうれしいです。

台湾観光協会によれば、「台日同名32駅プロモーション」は、今後も異なる内容でのイベントを用意しながら継続実施していく予定だそうです。これからもこの企画を応援しつつ、また台湾ですばらしい体験をする方が増えることを楽しみにしています。

コ　ラ　ム

かつて甲子園に台湾代表が出場していたことをご存じでしょうか。無名の台湾チームがやがて甲子園で準優勝を勝ち取る物語〈KANO〉の試写会に行って来ました。

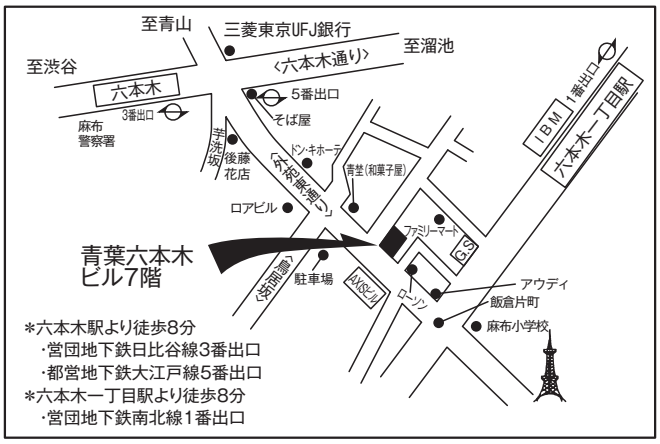
日本統治時代の台湾では、日本人のみで編成されたチームが殆どでしたが、松山商業で鬼監督と呼ばれた近藤兵太郎は、台湾南部の嘉義農林学校野球部〈KANO〉の監督に乞われ、独自のスタイルで指導を始めます。それは、打撃力のある台湾人（漢民族）、俊足の原住民、守備に長ける日本人と３民族の強みを活かしたチーム編成をし、選手を分け隔て無く特訓することでした。これまで１勝もしたことがなかった〈KANO〉はみるみる実力をつけ、日本人のみの常勝チームに連勝し、1931年、悲願の甲子園出場への切符を手に入れます。無名の民族混合チーム〈KANO〉は、次々と並みいる強豪を打ち破り、ついに準優勝を勝ち取ります。

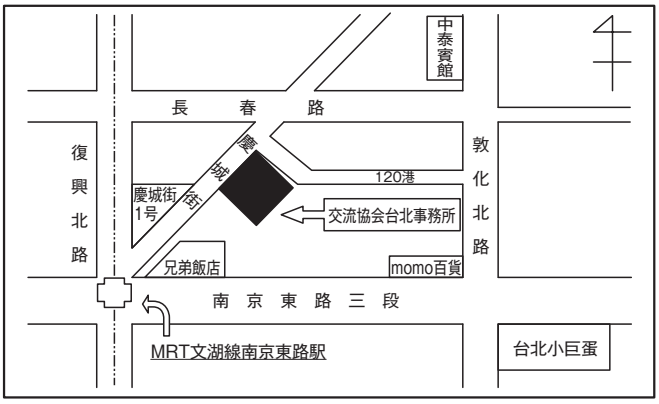
どんな状況でも諦めずに突き進む精神、そして違う民族が区別無く、同じ人として協力することの大切さを、感動を持って気づかされた３時間でした。この24日から公開されておりますので、感動を味わいに映画館に足を運ばれることをお薦めします！

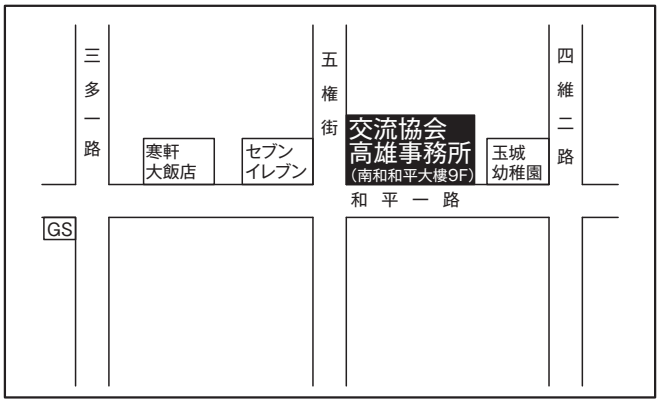
（M.N）

交 流　2015年1月　*vol.886*

平成27年１月26日　発　行
編集・発行人　舟町仁志
発　行　所　　郵便番号　106－0032
東京都港区六本木３丁目16番33号
青葉六本木ビル７階
公益財団法人　交流協会　総務部
電　話（03）5573－2600
ＦＡＸ（03）5573－2601
ＵＲＬ http://www.koryu.or.jp
表紙デザイン：株式会社　丸井工文社
印　　刷　　所：株式会社　丸井工文社







台北事務所　台北市慶城街28號　通泰大樓
Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st.,Taipei
電　話（886）2－2713－8000
ＦＡＸ（886）2－2713－8787
URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3 contents.nsf/Top

高雄事務所　高雄市苓雅区和平一路87号
南和和平大樓９Ｆ
9F, 87 Hoping 1st. Rd.,Lingya Qu,kaohsiung Taiwan
電　話（886）7－771－4008（代）
ＦＡＸ（886）2－771－2734
URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3. contents.nsf/Top

日本と台湾との架け橋

公益財団法人

交流協会

Interchange Association,Japan(IAJ)